
バカと疫病神に憑かれた美女

アンコウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと疫病神に憑かれた美女

【Nコード】

N3480BA

【作者名】

アンコウ

【あらすじ】

彼女に関わったら不幸になる。疫病神。そう周りから言われ続ける少女、矢桐麗華。彼女自身も出来る限り誰とも関わろうとしない。そんな彼女にFクラスの面々はどう関わっていくか。そして疫病神と呼ばれている麗華は変われるのか。

プロローグ（前書き）

初めまして。これが処女作になります。

最初は主人公視点で書きましたが、3人称の方が良いのでしょうか？

ご意見頂けると嬉しいです。

プロローグ

「お、 約束通り来たな。 矢桐麗華」

「.....何の用？」

文月学園1年生の私は授業が終わり放課後、 隣のクラスの根本恭二君に屋上に呼ばれていた。

「お前、 疫病神なんだつてな」

「.....それが何？」

またこの話か。 うんざりする。 確かに私に関わった人は不幸になる。 だから誰にも近付こうとしないのに.....。

「だが俺はそんなこと気にしない。 どうだ？ 俺が付き合ってやろうか？」

「付き合っつて何を？」

「ちっ、 だから俺の彼女にしてやろうかって聞いているんだよ。

どうせお前には無縁の話だろ？」

「.....何を考えているの？」

彼の言う通り、 友人すら満足に出来ない私に彼氏なんて出来る訳ない。 それを知っていて何故彼はこんなことを？

「だから、 俺は不幸とかそんなものは信じてないんだよ。 大事ななのはここだよ」

そう言って自分の頭を人差し指で突つく根本君。

「なあ麗華、お前は疫病神だが賢いし見た目も良い。俺好みの女だ」

いきなり名前を呼び捨てにし、さらに腕を肩に回してくる。まあ何も感じはしない。ただ……

「……分かった。彼女になる」

「くくつ、物分りが良くて助かる。流星は俺の女だ」

……バカな男。ただそう思った。

「……ぐう……」

私の目の前で根本君が倒れている。あの後早速デートでもするか、と言われ、肩に手を回されたまま学校から出ようとしたら、

『危ない!!!』

そんな叫び声が聞こえた次の瞬間には．．．．．野球部の打球が根本君の頭に直撃。大量の血を流している頭を抑えながらうずくまっている。

．．．．．やっぱりだ。私にあれだけ密着していたらきつと良くないことが起こる。そんなこと分かっていた。それは根本君も噂で聞いていたはず。なのにそれをたかが噂、とても思っていたのだらう。

「．．．．．く．．．こ、この疫病神があ!! さっさと離れる!!!」

不幸とかそんなものは信じていないなんて言ったのは私の同情をさそうためだった。今の根本君を見てはつきりした。いや、初めから分かっていた。分かっていたけど．．．．．嬉しかった。少しでも人と話せたことが。例えそれが愚かな行為をしている男でも。

「お、お前のせいだこの疫病神!! 二度と俺の前に現れるな!!」

それだけ叫んで根本君は意識を失った。

言われなくても分かっている。やっぱり私は．．．．．不幸を呼ぶから。

近くにいた部活の顧問や生徒達が根本君の元に集まっているのを背に、私は一人その場から立ち去った。

第1問

私がこの文月学園に入学してから二度目の春。

校舎へと続く坂道の両脇に咲き誇っている桜に見惚れつつも、校舎へと向かう足は止めない。

そして玄関の近くまで歩くと、スーツを着ていても分かるほどの鍛え抜かれた筋肉を持つ教師が立っているのが見えた。

「矢桐、おはよう」

「おはようございますお父さ．．．．．西村先生」

「．．．．．お前はよくそうやって言い間違えるな」

西村先生が私の言い間違えに苦笑いを浮かべ、私は俯く。顔が真っ赤に染まっていくのが分かる。凄く．．．．．恥ずかしい。西村宗一先生。生活指導担当の教師。そして学園で唯一普通に接してくれる人。

「．．．．．先生はあの男より私に優しくしてくれるから．．．
つい」

「そういうことを言うな。矢桐のお父さんは俺なんかよりずっとお前のことを思っているからな」

それは違う。私のことを疫病神って罵ってこんな遠くにまで転校させたあの男が．．．．．。

「ま、今日は新しい学年のスタートの日だ。元氣だしていけ」

そう言い、私の頭をポンポンと叩く。

．．．．．西村先生と一緒にいるとすごく心地よい気分になる。

安心してゐるからかな。だって西村先生は私と一緒にいても不幸にならない。いや、多分なつてゐるんだらうけど、いつものことだ、って笑つて言つてくれるから……不幸にならないと思ひ込んでしまふ。

「これがお前のクラスだ。まあ結果は残念だったな。振り分け試験前日に風邪をひいてしまふとはな」

「……いえ、体調管理が出来ていなかった私のせいですから」

西村先生が持つてゐる箱から取り出した封筒を受け取る。

「……ちなみに風邪をひいたというのは嘘だ。本当のことは話したくない。これ以上先生に心配をかけたくないから。私は受け取つた封筒の上の部分を破き、中の紙を取り出す。」

「……本当に残念だ。Aクラス確實のお前があんなバカどもと1年をとにもするとは」

「……そこまで言わなくても。でも、やっぱり変な人が多いのかな。」

取り出した紙を開き、書かれてゐるクラスを確認する。

『矢桐麗華………Fクラス』

「せんせーい。おはようございまーす」

「ん？ よし………、吉井、なんだその格好は!？」

分かりきつた結果を確認し靴箱に向かおうとすると、後ろから男子生徒らしき声が聞こえた直後、西村先生が絶叫した。

「……なんだらう? と私は後ろを振り返ると………」

「何故セーラー服なんかで登校してきているんだお前は!？」

「．．．．．ほんと、なんでセーラー服？ 女装趣味があるの？
．．．．．怖い。」

「矢桐、早く教室に向かえ！ 吉井のバカが感染したら大変だ！
！」

「ちょ!？ なんてことを言うんだ鉄人！ その子に誤解されたらどうするんですか！ 制服をちよつと間違えただけなのに!！」

「制服を間違える時点でお前は極上のバカだ!! 矢桐、早く行
け」

「．．．．．ごめんなさい先生。 やっぱり不幸に．．．」

「．．．．．気にするな。いつものことだ」

「え？ 僕!! 不幸扱い!？ つて鉄人! いつもセーラー服を着ている変態みたいに言うのやめてよ!! あ、待って! 誤解を解かせて!ー!ー!!」

「．．．．．本当にごめんなさい先生。 私のせいで．．．変態の相手をしないといけないなんて。」

私はすごい罪悪感を感じながら、後ろの叫び声を無視して走って靴箱に向かった。

第2問

私がこれから1年間過ごす二年F組と書かれたプレートのある教室。その実態を見て感じる。 明らかかな悪意を。

「 教室じゃない。これは廃屋」

思わずため息をついてしまう。

. さっき通つて来たAクラスはホテルと見間違えてもおかしくなかった設備だったのに。 まあ、どちらにしても周りからの陰口や見下した視線は変わらないから、設備がどうのこうのつて関係なく居心地は悪いんだけど。

「 入るのやだな」

またそんな周りの雰囲気には耐えないといけない 少しは慣れたけど、 やっぱり嫌なものは嫌。

「 はあ」

「あ！ さっきの子！ おおーい!!」
「えっ！」

教室に入るのを躊躇っていると、 渡り廊下から覚えのある声が。

いや、 さっき聞いたばかりの音が まさか。

私は声のした方にゆっくり顔を向けると

「良かった、 君も同じクラスなんだね。 これでさっきの誤解が解け っって待って！ なんでそんなに慌てて教室に入るうとしてるの!?!」

警報警報警報！ さっきのセーラー服姿の女装趣味の変態君がこっちに走ってくる！！ 早く教室に入らないとヤバイッ！ 流石に変態への対応の術は持ってない！！ 私には急いで教室のドアを開けて中に駆け込むと……

「早く座れ、このウジ虫野郎」

「……………!?!? (ビクッ)」

警察警察警察！ 教室の中に人の言語を話すゴリラがっ！！ 早く保護して動物園に連れて行って！ って私変態とゴリラに囲まれた!?!?

「……………だ、誰か助けて……………」

助けなんて来るわけないけど反射的に呟いてしまう。

……………すると教室の奥からまさかの助け……………じゃなくさらに私を窮地に追い込むものが……………。

『『『美人を怯えさせるとは……………死刑に値する!!』』』

死神死神死神的オンパレード!? あ、私も……………無理。変態とゴリラと死神に囲まれたという最悪の状況を認識した直後、私の目の前が真っ暗になった……………。

「……………んっ、ここは……」

あれ？　ここはどこ？　なんで私の頭の下に座布団があるの？

体を起こし、　周りを見渡してみる……………が、　座布団に座って前を向いている生徒達しかいなかった。

なんかすごく怖い目に遭った気がしたんだけど、　気のせいかな。私は少し安心して、　座布団に正座してみんなが向いている教卓側に目を向ける。

「……コホン。　えーっと、　吉井明久です。　気軽に『ダーリン』って呼んでくださいな」

……………気のせいじゃなかった。　間違いなくさっきの女装趣味の変態君が、　女装しているのに『ダーリン』と呼んでくれてって奇妙なことを言っている。

『ダアア……リイーン!!』

……………しかもそれに野太い声の大合唱で応えているクラスメ

イト達。

「……失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願い致します」

気分が悪そうな顔で席に戻って行く変態君。そして私の隣の席に座つ……って隣!?

……どうしよう。まさか隣に来るとは。流石疫病神と呼ばれている私。最悪の展開。あ、疫病神って自分は不幸にならないからそれ以上ひどいってことになる。

取り合えず顔を伏せて出来るだけ話しかけられないようにする私に、さらなる追い討ちが。

「えー、次は矢桐さん。前に来て自己紹介お願いします」

……普通次は私の列の一番前のはず。どうして私が次なんだろう……。折角変態君にバシてなかったかもしれないのに……。

心の中で愚痴つても仕方がないので、私は言われた通りに立ち上がって教卓の前に行き、

「……矢桐麗華です。学校内で噂されている疫病神は私です」

それだけ言うと、さっさと自分の席に戻る。

これで誰も私に話しかけない。変態く、えーつと吉井君も流石に自分が不幸になるのにそんなバカな真似はしないはず。

これで良かった……。私に関わって不幸になって、それで罵られるより無視されたり陰口叩かれたりする方がずっといい。

これで……。いいの。

ざわざわざわざわ

私の自己紹介を聞いて周りも騒がしくなる。
いいよ、悪口でもなんでも好きに言っ
て。。。。。

私は気にしないから
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480ba/>

バカと疫病神に憑かれた美女

2012年1月9日23時53分発行